

3、石井方式漢字指導法の全面的実践

石井方式漢字指導の2つの基本原則のうち、1つについては(社会科用語は社会科で、理数科用語は理数科で提出し指導すべきである)すでに第1年から実践してきた。

しかし、肝心の国語科においては、書取り会のあり方をはじめとして従来のドリル中心の方法がやはり大勢をしめ効果がなかなかあがらないでいるのが実情であった。それどころか、書取り会一つをとってみても私達がねらっていたことと逆にかえって漢字嫌いな子どもをつくっているのではないかという危惧さえ感じ始めていた。

そこでいろいろ話し合った末にこの際抜本的な指導法の改善をしなくてはということになった。それはもう一つの基本原則(社会一般に漢字を用いている言葉は相手がたとい小学校の1年生であっても最初から漢字で表記して提出しなければならない)の実践より他はないということになった。

「とにかくだまされたと思ってやってみましょう」と提案し、いい悪いはその反省にたって決めようとの合意を得て、2学期の最初の单元からいわゆる「漢字貼り」の実践を始めた。

「漢字貼り」の実践

国語教科書のかな言葉を漢字表記に改めるため次の方法をと

った。

ア、かな言葉の上に漢字言葉を印刷した小片を貼りつける

イ、かな言葉のわきに漢字を書き入れる

(資料 3)

漢字の選択範囲についてはいろいろな意見が出たが、結局普通の辞書に表記してある漢字はすべてということにし選択は担任の考えによることにした。

一単元の漢字貼りを終えて反省会を開くと次のような意見が出た。

予想していたより楽しく早く貼ることができた

よくできる子は貼りながらすぐ字を覚え、貼り終わった時にはそのほとんどが読めるようになった

子どもがよく覚える字は、字画にあまり関係がないようだ
文の前後の関係からその漢字を読んでいる

漢字になおすとかえって楽に読めるという子が多い

まちがえて読む部分はかえって平仮名のところである

何よりもあれほど危惧していた教員が、予期以上の成績に気をよくし、今学期末まで続けてみようという提案に全員が賛成した。

普通の辞書に表記してある漢字はすべて「貼り漢字」として読ませようということで実践を続けていったがそのうちだんだん問題点ができ

た。即ち、学年によって表記する漢字の選択がまちまちであること、普通に使用する範囲をこえると思われる漢字まで「貼り漢字」に選ぶ事例ができたこと(例、綺麗、何処から、頂戴、攫、微塵子等)である。そこで当分の間「当用漢字音訓表」「公用文の書き表し方の規準」等を参考にし、各学年毎に研究し後々いい機会に決めることにした。

最終的には当用漢字の範囲内ということに落ちついたが個人的な好みまでは制限しないで自由にした。

ここまでは比較的詳しく述べてきたが、それは私達が自由な雰囲気の中でお互いの共通理解をはかりながら、全校態勢でこの研究実践に取り組んできた経緯を知ってもらいたかったからである。なぜならば、このようなスタート、このような経緯が以後10年にわたって実践を続けてきた原動力になっていると信じているからである。

このあとはいよいよ石井先生に御指導をいただくことになるが、三学期になると早速出東小学校において下さった。そして私達は「漢字教育」に大きく開眼し、単に漢字の指導法ばかりではなく、教育全般について得がたい御指導をいただいている。

以下の教育については要点だけを述べることにする。